

[学術論文]

# 『ボヴァリー夫人』に描かれたジェンダー構造の再検討

—七月王政期の女子教育に焦点をあてて—

Le réexamen de la structure de “Gender” dans *Madame Bovary*

野 田(水 町) い お り

Iori (MIZUMACHI) NODA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 16

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 16号  
2011年12月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN  
DECEMBER 2011

[学術論文]

## 『ボヴァリー夫人』に描かれたジェンダー構造の再検討

—七月王政期の女子教育に焦点をあてて—

### Le réexamen de la structure de “Gender” dans *Madame Bovary*

野田（水町） いおり

Noda (Mizumachi) Iori

はじめに

第1章 七月王政期の女子教育の二重制

第2章 エンマと七月王政期の女子教育

第3章 『ボヴァリー夫人』に描かれた七月王政期の女子教育をめぐるジェンダー構造

おわりに

**要旨** 本論文では、ギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』を取り上げ、同作品の社会背景である七月王政期の女子教育に焦点をあててテキストを考察し、『ボヴァリー夫人』に描かれたジェンダー構造を検討する。『ボヴァリー夫人』という作られた話を、女子教育という実際の社会環境を考慮に入れて考察する本稿の試みは、文学も歴史的負荷を負うものであり、無意識的に受容される文化や社会規範から切り離されるべきではないという筆者の立場を前提としている。

七月王政期の女子教育は、保守性と積極性という両義性を持ち合わせている。つまり、七月王政期の女子教育は、男性優位社会を補強する一方で、女性の自立を促進するというアンビバレントなものである。一方、『ボヴァリー夫人』の主人公であるエンマ自身も、家父長的で保守的なブルジョア社会に順応したいと望みつつも、自分の内的欲求をかなえるため、自ら考え、自らの意志で目標を達成したいと願うような、相反する価値観を持つ女であった。エンマの性格と七月王政期の女子教育に着目して『ボヴァリー夫人』を再読すると、アンビバレントな性格の持ち主が、両義的価値を持つ七月王政期の女子教育を受け、それによって自我が芽生えた時から不幸が始まるイロニックな物語という新たな読み方を提案することが出来る。すなわち、『ボヴァリー夫人』は、一義的ではない七月王政期のジェンダー構造を背景として、そのジェンダー構造に挑戦し、失敗した一人の女の人生の物語といえるのである。

**キーワード**: 『ボヴァリー夫人』、エンマ、七月王政、ジェンダー、女子教育

\* *Madame Bovary*のテキストには、アルベール・チボーデ (Albert Thibaudet) とルネ・デュメニル (René Dumesnil) 編集によるプレイアッド版全集の第1巻を用い、引用はその頁のみを記す。(Oeuvres complètes de Gustave Flaubert, “Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 5 vols, 1983.) なお、翻訳中の下線は、強調のために筆者が引いたものである。

## はじめに

本論文の目的は、ギュスターヴ・フロベール<sup>1</sup>の『ボヴァリー夫人』<sup>2</sup>を取り上げ、同作品の社会背景である七月王政期の女子教育に焦点をあててテキストの考察を行うことで、『ボヴァリー夫人』のジェンダー<sup>3</sup>構造を解明することである。

『ボヴァリー夫人』には、主人公エンマの人生における苦悩と葛藤が詳細に描かれており、これらは、当時の社会背景と無縁ではない。というのも、フロベールは、「今、このとき、フランスの多くの村々でボヴァリー夫人は泣いている」<sup>4</sup>と書簡に綴っており、家父長制の強い社会規範にとらわれ、自己解放を求めることがタブーとされた女性たち、特に地方の中産階級の女性の鬱積した感情を『ボヴァリー夫人』の中で描き出したからである。筆者も、エンマの苦しみは当時の社会規範に起因するものであり、フロベールは、エンマを通じて、地方の中産階級のブルジョア女性たちの閉塞感を表現していると考えている。

しかし、一方で、エンマの苦しみは本人が引き起こしたものであり、彼女の人生における苦悩と葛藤は、個人の性質によるものであると結論づける研究者たちもいる<sup>5</sup>。彼らは、エンマが子どもの頃に読書をしすぎて現実と虚構の区別をなくしたこと、過剰な夢想癖があったこと、虚栄心の強さなどを上げ、エンマの葛藤と社会背景を安易にイコールで結んでしまうのは危険であると主張する。というのも、この時代の中産階級の女性たちが、みな、エンマのように結婚生活に不満を感じ、不貞を犯し、服毒自殺に追い込まれてはいないことを考えると、エンマの一例を普遍化するのは困難だからである。

たしかに、小説は作者によって作られた話ではある。しかし、作られた話としての小説には、歴史的・社会的負荷を負った個人である作者が、どのような認識を抱き、どのような意図を込めて制作したかという点で、すでに、その当時の時代性が入り込んでいる。特に、本稿が焦点を当てて検討する「ジェンダー意識」は、人々の無意識的な観念の中に根付いているものである。個人的な意識のレベルではなく、集団的な通念や社会規範に由来する要素がある。筆者は、文学は、社会的負荷を負って成り立つものであり、文化やそれらを形成する規範と切り離されるべきでは

<sup>1</sup> Gustave Flaubert (1821-1880) 以後、フロベールと記載する。

<sup>2</sup> フランス語原題*Madame Bovary* 出版年は1857年。『ボヴァリー夫人』は、そのスキャンダラスな内容で、当時のフランス社会にセンセーションを巻き起こし、出版をめぐって裁判になった。結果として、作者であるフロベールの名を世に知らしめただけでなく、19世紀のフランスリアリズム文学を代表する傑作とも言われた。『ボヴァリー夫人』のあらすじは以下の通りである。主人公であるエンマ・ボヴァリーは、ロマンティックな甘い感傷と夢のような結婚生活に憧れて田舎医者シャルルと結婚するものの、すぐに単調な現実生活と夫の凡庸さに幻滅する。エンマは満たされない感情に身を焼かれ、甘い夢を追って不倫をし、借金を作り、最終的には服毒自殺をする。

<sup>3</sup> 本論で使用するジェンダーとは、社会的に作られた男女の性役割のことを指し、自然が所与する男女の性差を意味するものではない。

<sup>4</sup> 1853年8月14日、ルイーズ・コレ宛ての書簡。「地方風俗」という『ボヴァリー夫人』の副題について、自身の見解を表したものである。

<sup>5</sup> エンマの悲劇に関しては、ブルジョア的現実であり、日常のどこにでもある出来事と位置付けて『ボヴァリー夫人』が構成されていると考えられてもいる。アルベール・チボーデ、サルトル、ルネ・ジラルド、マルト・ロベール、バルガス＝リョサらの研究は有名である。日本では、伊吹武彦、山田爵、山川篤、工藤庸子などが高名である。

ないという立場である。そうした意味でも、『ボヴァリー夫人』は、やはり、当時の中産階級の女性たちをめぐる社会的な環境も考慮に入れて読まれるべきである。

ところが、現在まで、エンマと七月王政期の社会規範の関係について、具体的に示された論文はほとんどない。その中で、小山美沙子が1982年に「ボヴァリー夫人と当時の状況」という論文を書き、エンマの人生における葛藤を民法典と照応して考察した。筆者が知りうる限り、『ボヴァリー夫人』のテキストと七月王政期の社会規範との具体事象とを結び付けて書かれた論文はこれだけである。この論文により、エンマを含め、当時の女性たちが、法制度という点において、何の権利も与えられず、いかに不遇で窮屈な暮らしを強いられてきたかが明らかになった。しかし、筆者は、エンマの人生の葛藤は、もっと多角的に語られる必要があるように思う。服毒自殺の末、苦しみぬいて死んだエンマの姿は、社会通念に縛られ、思うように生きられない女性たちの姿を代弁している。それならば、エンマの壮絶な死の原因は、法律以外の社会規範にも依拠するところがあるのではないか。

筆者は、エンマの悲劇は、当時の若い女性達を拘束していた男性優位社会の歪んだジェンダー構造に原因があると推測している。このジェンダー構造こそが、エンマのジェンダー意識を形成し、彼女を破滅に導いたのである。このようなジェンダー構造は、当時の社会規範によって形成されたのであろうが、筆者は、その規範を形成した基盤は、当時の女子教育によるところが大きいと考える。したがって、本稿では、エンマの悲劇の原因を、『ボヴァリー夫人』の時代背景である七月王政期の女子教育にもとめてテキストの再読を試みる。第1章では、七月王政期の女子教育がいかなるものであったかを明らかにし、第2章では、『ボヴァリー夫人』の中でも、とくに、エンマと女子教育に関するものを取り上げて考察し、最後に、第3章では、『ボヴァリー夫人』に描かれた七月王政期の女子教育をめぐるジェンダー構造を明らかにしたい。

## 第1章 七月王政期の女子教育の二重制

### 第1節 七月王政期の女子教育の実態

まず、本節では、『ボヴァリー夫人』の時代背景である七月王政期中産階級の女子教育がいかなるものであったのかについて述べておくことにする。

『ボヴァリー夫人』は、七月王政期のノルマンディーの田舎町を舞台に物語が展開されている。七月王政は、ブルボン＝オルレアン朝、つまり、ルイ・フィリップが即位した1830年から1848年までの18年間を指し、産業革命による経済変化が人々の生活や道徳観にさえ影響を及ぼし、家父長制の保守的なモラルが形成された時期でもある。七月王政期にはブルジョアによる支配体制がとられ、この支配体制は、保守的で規範性の強いものであった。1833年には、ブルジョア的教育を重視したギゾー法も成立している。ブルジョア的教育とは、性別分業と家父長制を基盤とした

家族制度を維持するための教育であり、とくに女子教育に関しては、女性の能力は男性よりも下であると確定しており、閉鎖的で保守的な教育方針が掲げられていた。

たとえば、マルティヌ・ソネは、『女の歴史Ⅲ』の中で次のように記している。「女子の教育はすべて男子と関連していなければならない。彼らに気に入られること、彼らの役に立つこと、彼らから愛され尊敬されること、彼らが幼い時は彼らを育て、大人になったら世話を焼き、助言を与え、慰め、彼らの生活を快適で甘美なものにすること、これこそ、いつの時代にも女性の義務であり、子どものときから彼女たちに教えなければならないことである<sup>6</sup>」。

こうした女子教育の方針の中にあつて、中産階級以上の子女たちは、修道院の寄宿舎で教育を受けていた。19世紀を通じて、おもに女子教育を担ったのは、革命によって破壊され、その後、復活を遂げた修道会だった<sup>7</sup>。女子教育は、公的に保障されたものではなく、カトリック教会にゆだねられていたのである。以下は、レジオン・ドヌール学寮の創立目的について、創立者であるナポレオンが書いた手紙の一節である。ナポレオンは、ルソーの『エミール』を愛読し、保守的な女性観を有していたことはよく知られている。また、レジオン・ドヌール寮は、当時、女子教育の唯一の公的機関であり、ほとんどの女子教育を担っていた修道院のモデルとなり、七月王政期には、とくに大きな影響力を保持していたと言われている。

「エクーアン(学校の所在地)で育てられる娘たちは、何を教えられるのでしょうか。理屈をこねる女ではなく、信心深い女性を育てましょう。女性の頭の弱さ、考えが一定でないこと、社会の中での女性の運命、永遠に続く忍従の必要性、寛容で親しみやすい慈悲と、いったことのすべては、宗教によって、つまり、慈悲深く穏やかな宗教によってでしか、得ることは出来ないのです<sup>8</sup>」

上記のナポレオンの手紙は、「女は頭脳が弱いため、理屈を述べ連ねるよりも、信心深く、慈悲深く、また、社会における自らの運命を受け入れて生きる必要がある。そのためには、何より、宗教が必要である」ということを示している。また、特筆すべきは、「女は社会の中では忍従すべき存在である」ということを明記している点である。当時の女性たちが、一人の個人としての権利を認められず、女であるという理由だけで、いかに苦痛を強いられていたかが垣間見られる手紙である。ナポレオンは、女の現世での生は、苦悩に満ちている。だからこそ、宗教が必要であると述べているのである。

さらに、レジオン・ドヌール学寮の学習計画を見てみると、「宗教は教育の基礎である」との記載を認めることができる。レジオン・ドヌール寮では、他にも、読み・書き・算数を中心とし

<sup>6</sup> マルティヌ・ソネ著 天野千恵子訳「教育の対象としての娘たち」、『女の歴史Ⅲ』、藤原書店、1995年、pp. 170-171

<sup>7</sup> フランス革命前の教会の初等教育機関である「小さな学校」や、革命後の教育の発展のプロセス、教会と初等教育の関係に関してなどについては天野知恵子著『子どもと学校の世紀』（岩波書店、2007年）に詳しい記載がある。

<sup>8</sup> Rebecca Roger, *Les demoiselles de la Legion d'honneur. Les maisons d'éducation de la Legion d'honneur au XIXe siècle*, 1992, paris.

た科目、社交術を身につけるためのダンス、そして裁縫などの家事全般について教育が施されていた<sup>9</sup>。以上のことから、七月王政期の女子教育の主な課題が、宗教教育と、男にとって都合のよい女（娘、妻、母）の育成であったことが分かる。もちろん、計算や文法、歴史などの教育も提供されているが、それらは女性達の可能性を広げ、自立を目指すためのものではなく、家庭における妻、母としての最低限の知識を得るためのものである。

当時の価値基準、社会規範に従って「家庭の天使」<sup>10</sup>の役割を与えられた中産階級の女性たちは、男性の安らげる場所作りや、家庭を守ることを第一の務めとしなくてはならず、修道院では、保守的で閉鎖的、男性優位型の家族形態を維持するための女子教育が行われていた。修道院で教育を受けたのは、主にブルジョアや中産階級の子女たちであり、彼女たちは、必然的に、社会から望まれる女性へと成長していったのである。

## 第2節 「母親講座」による女子教育の効用

ここまで、七月王政期の女子教育の中核を担っていた教育修道院における女子教育の内容や実態について見てきた。しかし、一方で、「母親講座」と命名され、修道院とは異なる教育施設での女子教育も同時期に行われていた。そこで、本節では、「母親講座」について見ていくとともに、七月王政期の女子教育が、中産階級以上の女性たちに、いかなる影響を及ぼしたのかについても考察していきたい<sup>11</sup>。

革命期を通じて、民衆の「宗教からの自由」という要求の中で、多くの修道会が解散に追い込まれ、それまで女子教育を支配していた教育修道会は力を無くしてしまった。その間、教育修道会に代わって、女子中等教育を担ったのが、「教育学寮」と呼ばれる寄宿舎である。そこでは、修道女ではなく一般の女性による教育が行われていた<sup>12</sup>。一般女性の経営者は、生活のあてのなくなった貴族の女性が多く、そのため、教育学寮の教育内容は、革命以前の女子修道会とほとんど変わらなかった。というのも、そもそも貴族の女性たちは修道院で教育を受けており、そのような教育を受けた女性が教える科目が、かつての教育修道院のものとは一致するのは当然である。

しかし、こうした制限の隙間から「講座」と呼ばれる新しい教育が生まれてきた。女子教育を行う教育学寮では、「母親講座」と呼ばれる講座が展開されるようになった。「講座」の授業内容は多岐にわたるが、それらは学者になるためでも、自立するためのものでもなく、女性としての役割を全うすることにあつた。先にも述べたが、女性の役割とは、男性の良き伴侶になることであり、夫を理解し幸福をもたらすことであり、こどもを導くことである。「講座」では、女性が

<sup>9</sup> Octave Gréard, *L'Enseignement secondaire des filles*, 1883, Paris.

<sup>10</sup> angel in the houseの和訳。妻は仕事で疲れた夫を癒し、子どもに対しては常に慈悲深く接する「家庭の天使」のような存在であることを期待された。

<sup>11</sup> 母親講座に関しては、小代肇子著「母親教育講座—七月王政期の女子教育に関する考察」（フランス教育学会紀要15号、2003年）に詳しい記載があり、本論文はそれを参考している。

<sup>12</sup> 小代肇子、p. 9.

そうした役割を全うするためには、できるだけ男性の教育に近いものを女性に与えるべきで、しかし、男性と同じ教育ではなくて、同じようなものが必要だと男性側の理解を求めた形で、授業が展開されている<sup>13</sup>。しかしながら、「講座」における授業科目は、エクーアンの事例とは異なり、実利的である。文学、文法、歴史、自然科学、哲学、地理、歴史、数学、美術など多岐に渡っている。修道院では、宗教教育やダンスや料理、縫物などが中心であったことと比較すると、大きな違いを認めることができるのである。

第1節で述べたように、七月王政下における女子教育は、ブルジョアが求める保守的な社会規範を補完し、強化する。しかし、一方で、目標こそ良い母親になるためのものであるとはいえ、「男性と同じ、あるいはそれと似た教育」を目標とした「講座」を受講した女性たちの何人かは、社会が望む良妻賢母にはならず、次の「講座」の開催者となり、社会に出て、自立して働いている<sup>14</sup>。自立した彼女たちはみな独身であった。当時、中産階級の身分を有しながら、結婚もせず、働く女性というのは、極めて例外的であり、社会の辺縁に属していた。働くことを選択した女性たちは、いわゆる中産階級の女性達にとって自明のことである「適齢期がきたら結婚して母になる」という社会が求めた規範的な価値観をからは逸脱している。

しかし、いずれにせよ、七月王政期の保守的な男性優位の価値観が支配する社会にあって、このような女性たちが教育の世界で活躍することで、女性の活動に新しい道が開けたことは言うまでもない。近代家族観が求めた女子教育から、新しい女性が育ち、やがて、後のフェミニズム運動へとつながっていった。したがって七月王政期の女子教育には、第1節でみられたような、修道院における宗教教育や良妻賢母教育により、女を規範に留めておく保守的な要素と、「講座」に見られるような、社会とのつながりを形成し、女性の自立を促進する可能性を持つ積極的な側面の、両義的な二重制が見られるのである。その意味で、七月王政期の女子教育は、極めてアンビバレントな構造を持ち合わせているのである。

## 第2章 エンマと七月王政期の女子教育

『ボヴァリー夫人』の主人公であるエンマは、ブルジョア階級ではないものの、裕福な独立自営農民の娘であったため、中産階級の子女たちと同じ教育を受けている。エンマは、ルーアンにあるウルスラ修道院で寄宿舎暮らしをしており、テキストの中には、修道院でのエンマの暮らしが細かく描かれている。そこで、第2章では、第1章で明らかにした実際上の女子教育と、テキストに描かれているエンマの教育と照らし合わせながら、エンマの受けた教育と実際的女子教育の関連性について、実証的に論考を進め、エンマの受けた教育がエンマに及ぼした影響について

<sup>13</sup> 小代肇子、p. 16。

<sup>14</sup> 小代肇子、p. 17。

考察する。なお、エンマの受けた女子教育については、宗教教育、良妻賢母教育、社交術の3つに大別できるが、第2章では、主に宗教教育と良妻賢母教育を扱い、社交術については第3章で触れることにする。

### 第1節 エンマと宗教教育

『ボヴァリー夫人』の中には、修道院で寄宿生活をしているエンマの姿が描かれている。エンマが生活したウルスラ修道院の教育目的は、「信仰の神秘の伝達、精神修養、祈祷、説教、聖者や殉職者に対する畏敬の念、肉体を軽んじ、魂の救いを大切にすることを教えること」であった。エンマは、12歳の時に父親に連れられて修道院に入ったが、当初は修道女たちが驚くほどに聖書を耽読し、美しい言葉で神の恩寵を語り、修道女たちを感嘆させている。

しかし、『ボヴァリー夫人』で描かれているエンマの聖書の読み方は、実際の宗教教育とは異なり、極めて独特のものであった。というのも、エンマは、聖書の中でも自分の気に入った部分、つまりロマンティックな感情をかきたてられる部分だけを選んで読み、イエス・キリストの受難を思い感情を高ぶらせただけであり、聖書を女子教育のための教本としてではなく、壮大な読み物としてとらえていたからである。テキストには、エンマの聖書の読み方が次のように記されている。「感激的で実際の心、花の美しさにひかれて教会を愛する精神、恋愛の言葉のために音楽を愛する気持ちを持ち、情熱の刺激のために本を読んでおり、エンマは、物事から自分の利益だけを引き出し、自分が直接取り入れたいと思わないものは、全て不要として、捨て去ってしまった<sup>15</sup>。」そのため、エンマは、しだいに聖書に魅力を感じなくなり、飽きてしまう。そして、15歳を過ぎると、エンマは聖書を読むのをやめ、かわりに隠れて小説を読みふけるようになる。エンマは週に一度、シーツを交換に来る掃除のおばさんに頼んで、貸本屋で小説を借りてきてもらい、古城の騎士たち、悲劇に満ちた女性たち、そしてイギリスの貴婦人にロマンティックな思いをはせるようになっていった。

結局、エンマは修道院で生活し教育を受けたものの、本来の宗教教育が目的とした信仰の神秘や、肉体よりも精神を重んじる教えを学んではいない。これは、修道院で学んだ中産階級の子女たちに共通のものではなく、エンマに属する特性である。その後、エンマは、規律あるものにはらだたしさを感じるようになり、修道院を辞めてしまう。その時の様子は、次のように記されている。

実際、彼女たちは（修道女たちは）、エンマに対し、お勤めや、修行や、9日間の願かけや、説教をむやみやたらに浴びせかけ、聖者や殉職者に対して抱かなければならない尊敬を説き、肉体の制限や魂の成就のための、けっこうな教えを講じすぎて、エンマは手綱を引かれた馬のように、急に立ち止り、そして、くつわが齒から抜けてしまった。(p. 51.)

<sup>15</sup> Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, p. 48.



エンマは、徐々に宗教教育を受け入れることが出来なくなっていった。宗教から逸脱することは、カトリックを基盤とした強い宗教規範を持つ七月王政期のフランス社会では、なによりもタブーであった。そのため、引用にあるように、フロベールは、宗教教育を拒否するエンマを馬にたとえて表現し、直接的な表現を避けている。規範に従い、修道院での宗教的教えをしっかりと守れば、社会的に守られ、安寧の生活を送ることができるだろう。実際、多くの中産階級の子供たちは、何の疑問もなく、宗教教育を受け入れていた。ところがエンマはそれを拒み、自らの意志で修道院から飛び出した。したがって、宗教教育を拒否するエンマの姿は、エンマが、当時の社会では一般的だとされていた保守的な規範の範疇に留まらないことの伏線となっている。

## 第2節 エンマと良妻賢母教育

第1章で述べたように、中産階級の子供たちは、宗教教育以外に、読書、書き方、計算、文法、歴史、地理、デッサン、音楽、ダンスの授業を受け、自分の着る下着、服を作っていた。彼女たちは、家庭の母が家の運営をするために必要なこと、たとえば、パンや栄養のあるものを準備すること、洗濯、針仕事などを学んでいた。これらは、良妻賢母教育と呼ばれている。

七月王政当時、教育を受けることはブルジョア的生活の証明でもあった。教育をうけることで、中産階級の人々は、自らを周囲と差異化していた。エンマも、田舎暮らしに辟易し、ブルジョア的生活への憧れがあったため、教育を受けたことで、自分を周囲の農民たちから区別していた。しかも、エンマに対する周囲の評価は、「ルノー嬢（エンマ）は、ウルストラ修道院で育ち、いわゆる良妻賢母教育を受けていた。ダンスや地理や絵の心得があって、タピスリーを織ることが出来て、ピアノも弾ける<sup>16</sup>」と記されており、周囲の人々は、エンマが教育を受けたことで、自分たちとは違う良家の子供であると感じている。

実際、『ボヴァリー夫人』に描かれたエンマの妻としての家事のやりくりは見事であり、お手伝いさんを上手に使い、医者である夫の仕事の手伝いをし、村の人々が驚くような食事を用意し、さらに部屋の中を美しく飾り付けた。おかげで、村人たちの尊敬は、夫のシャルルにまで及んでいる。エンマは修道院で学んだ良妻賢母教育の成果を結婚生活の中で見事に発揮し、理想的な妻になり、家父長制的な家族形態の維持に努めたのである。まさに、良妻を絵にかいたようなエンマの働きに、シャルルは心から満足していた。

彼女（＝エンマ）は時々デッサンを描いた。彼女の傍らにるのが、シャルルにとってはこの上ない幸せだった。（中略）ピアノとなると、指が速く動けば動くほどシャルルは感心した。エンマは高音から低音まで、鍵盤をいっぱい力強くたたいた。（p. 59.）

フロベールは、ピアノの音色ではなくエンマの指の早さに驚嘆したり、デッサンの内容よりも

<sup>16</sup> *Madame Bovary, Ibid.*, p. 36.

絵を描く妻のそばにいて満足しているシャルルの滑稽な姿を、イロニックに描いている。エンマは、夫であるシャルルを喜ばせるため、ピアノを弾き、絵を描いた。しかし、やがて、こうした行為にむなしさを感じるようになる。

これからこんな日が、永久に変わらず、数限りなく、また、何一つ起こらずにつづいていくのだろうか！（中略）エンマは音楽をやめた。弾いたって何になる？誰が聞いてくれる？エンマは、デッサンノートも、刺繍も戸棚の中にしまい込んでしまった。何になる？何になる？針仕事は、エンマをいらいらさせるだけだった。（p. 65.）

エンマは、結婚生活の中で、かつて学んだ良妻賢母教育の知識を発揮することに何の意味も見いだせなくなった。夢のような甘いロマンティックな結婚生活を与えてくれないシャルルにすっかり落胆していたエンマは、自分だけが夫を喜ばせることに不満を感じ、苛立ち、苦しんだ。良妻賢母教育を受けたことは、エンマを不幸にしたと言ってよい。修道院で受けた良妻賢母教育が、エンマの結婚生活を窮屈なものにしていくというストーリーは、エンマが家庭に留まることができず、社会規範から逸脱していくことのメタファーである。

### 第3節 『ボヴァリー夫人』における女子教育の問題

エンマは教育を受けたものの、自分の考えをまとめることも、客観性を持って自分の状態を分析することも出来ていない。これは、当時、修道院で行われていた女子教育が、思考することを目的としていないからである。エンマは感情が高揚し、そのせいでとめどなく涙が流れ、ひどい頭痛に悩まされた時でも、なぜ、自分が幸せでないのかを、客観性を持って自己分析することもできず、自分の言葉で、自分自身の不満を口にすることが出来なかった。

おそらく、彼女（エンマ）は、このような思いを誰かに伝えたかったかもしれない。しかし、雲のように形を変え、風のように捉え難いこの不安を、どう表現すればいいのか。エンマには言葉が欠けていた。機会も、そして大胆さも。（p. 52.）

自分の満たされない気持ちを伝えたいが、エンマは自分の言葉を紡ぎ出すことが出来ていない。エンマには言葉も機会も大胆さも足りず、鬱積した感情を誰にも伝えることができなかった。結婚生活に幻滅し、苦しんでいても、エンマは今とは違う新しい人生を自らの手で作り上げていくことについて、考えることさえできない。しかも、自立することを教えられず、他律的な教育を受けてきたため、自己解決をするのではなく、不幸の原因の全てを夫であるシャルルのせいにしてている。夫に頼ることが出来ないと分かると、神に縋ろうと司祭に苦しみを訴える。しかし、エンマの苦悩は聞き入れられず、司祭からは見当はずれな回答しか返ってこない。「女の幸せは、夫にとって良き妻となり、神の恩寵に縋ること」と修道院で教わったはずであったが、夫も神もエンマを救うことはない。そして、エンマは、満たされない現実改善のための、唯一の自己解決

の方法として、不倫に身をゆだねるのである。しかしながら、エンマは多くの書籍に触れ、書物を通して多くの知識を獲得し、本の中の多くの主人公の人生を通して、生きる教訓を得たのではなかったか。

女子教育の一環として、現実世界でも、『ボヴァリー夫人』の中でも、読書は大いに奨励されている。ケイト・フリントン (Kate Flint) が『女性読者』(=A Woman Reader) の中で指摘するように、読書は女子教育の中心的議題であった。読書には、知識を増やし、知性を高める長所と、日常からの逃避を促進するという二面性がある。問題なのは、知識を増やすことで女性が精神的、経済的自立を求め、男性の望む理想の姿と異なってしまうこと、もう一つは現実と虚構の区別を見失い、小説の世界に逃避してしまうことである。つまり、知性を高めても、現実逃避をしても、読書は危険な要素をはらんでいたもので、細心の注意を払うべき対象であった。結局、「結婚」と「母性」が女子教育において重要な課題とされ、女性が読んでもよい本は厳密に選択され、学校では、推奨読書として、男子には古典、歴史、科学、数学など、女子には、いわゆる教訓的物語が選ばれた。中産階級的女子への教育の重視を指摘した上で、七月王政期的女子教育は、女性が男性側に立ち、自分の能力を男性の幸せを付け加えるのに役立てることだと定義している。また、女性に求められる読書として以下のようなことが述べられている。読書を通して女性が身につけるべきは、夫の望むよりよい妻になること、よりよい母になることであり、そのための知識や社交術を身につけることである。これらは、ヨーロッパ中でみられた傾向である<sup>17</sup>。

結局、読書を通じて女性に求められるのは、男性のよき伴侶としての妻、そして母親になるための知識を身に付けることなのである。そうした社会規範によって選別された教訓的読書に嫌気がさした女性たちが隠れて手に取るのは、感情が高まり、自己投影できるヒロインが登場するロマンティックでメロドラマティックな煽情小説だった。エンマも、先に述べたように、知的な書物を読むことは奨励されておらず、しかし、聖書や教訓物語ばかりを読むことにも飽き、ロマンティックな夢をかきたてられる小説ばかりを読んでいる。その結果、エンマは自分の苦しみの原因さえ分からず、胸が張り裂けそうな苦悩を言葉にすることも出来なかった。苦しみの原因も分からず、誰にも苦悩を伝えられないエンマの姿は、思考することを望まれない女性たちの苦しみを代弁している。

男性優位社会、男性の保護なしに女性が生きられない社会で、結婚生活に不満を抱えても夫に言いだせず、自由に生きたいと願っても離婚することも出来ない。フロベールは、自分の思うように生きたいと願い、奔走するエンマの姿に、当時の女子教育が生んだ、歪んだジェンダー構造を体現させていると考えられる。エンマは自分の不幸の原因を自ら考え、客観的に判断することができていないため、全てを夫のシャルルのせいにする。たしかに、シャルルはあまりにも平凡かつ凡庸な男ではあるが、善良な性格であり、エンマを心から愛していた。エンマが自らの不幸

<sup>17</sup> Kate Flint, *The Woman Reader 1837-1914*, Oxford, Clarendon Press, 2002.

の原因をシャルルにばかり求めるのは、エンマの自分勝手な性格のように思われる。しかしながら、「女の幸せは結婚することである」と教えられ、男の役に立つための教育を受けてきたエンマにとっては、結婚しても幸せになれない以上、その原因を夫に求める以外なかったのだ。しかし、実際は、エンマの結婚生活の不満は、歪んだジェンダー構造に由来するものであり、エンマの不幸は、そのことを自覚することが出来なかったことである。

### 第3章 『ボヴァリー夫人』に描かれた七月王政期の女子教育をめぐるジェンダー構造

#### 第1節 七月王政期の女子教育とエンマの反応

七月王政期の女子教育は、宗教教育、良妻賢母教育、社交術の3つに大別できる。これらは、ブルジョア社会が要求する保守的で男性優位の社会規範を補完するものであるが、宗教教育、良妻賢母教育は、女性を「家庭の天使」として家庭の枠内に留めようとし、社交技術は、限られた範囲内ではあるものの、社会と女性達との繋がりを促進する働きがある。社交界という公の場で、女性が自らの知識と経験をもとに人脈を開拓し、自己実現を可能にするからである。

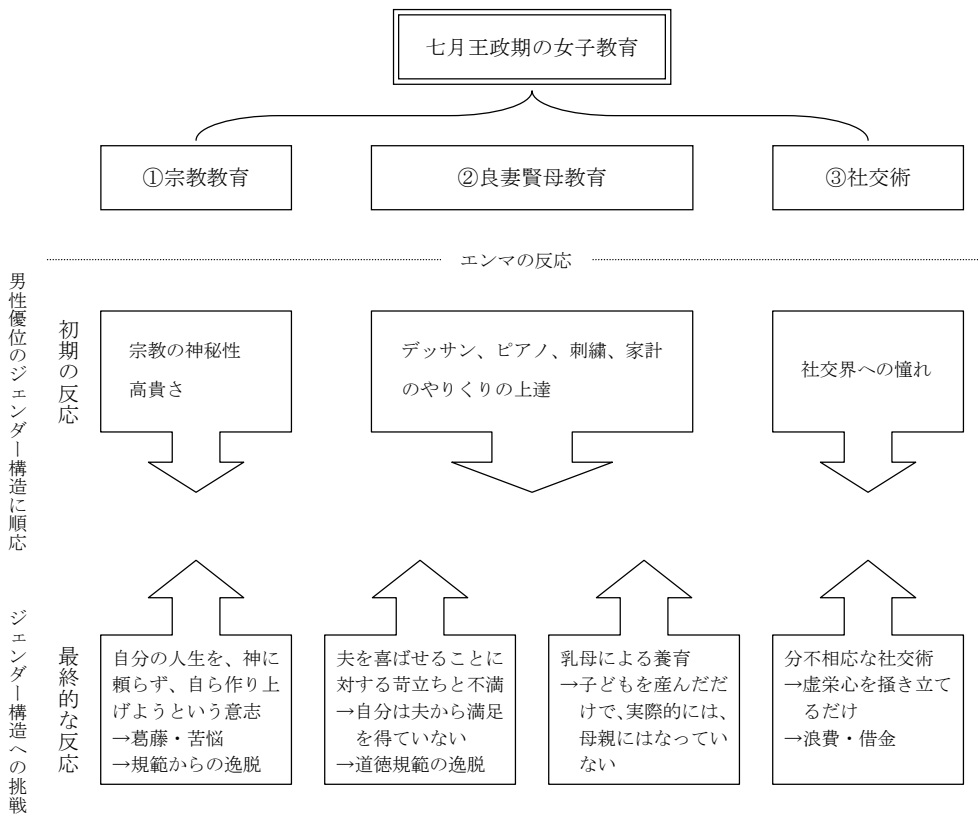


図1 七月王政期の女子教育とエンマの反応

図1にあるように、七月王政期の女子教育に関し、エンマの初期の反応は、宗教教育も、良妻賢母教育も、社交術も、極めて良好であった。宗教教育に関しては、修道女たちを驚かせるほどに雄弁に神の教えを語り、良妻賢母教育に関しても、見事な家事と家計のきりもりで、夫の評判を上げてさえいる。さらに社交術に関しても、田舎には似つかわしくない振る舞いが出来る洗練された印象を周囲に与え、貴族の目にとまり、舞踏会に招待されている。つまり、エンマの七月王政期の女子教育に関する初期の反応は、当時の男性優位社会を補完し、強化するものである。しかしながら、エンマの最終的な反応は、初期のそれとは大きく異なる。エンマは、結婚した後、自分の意志を持ち始め、宗教教育、良妻賢母教育、社交術のどれに対しても、初期の状態とは全く逆の反応を示すのである。初期反応が男性優位のジェンダー構造への「順応」であるならば、最終的反應は、この歪んだジェンダー構造への「挑戦」と言ってよい。

## 第2節 エンマの生き方にみられるジレンマ

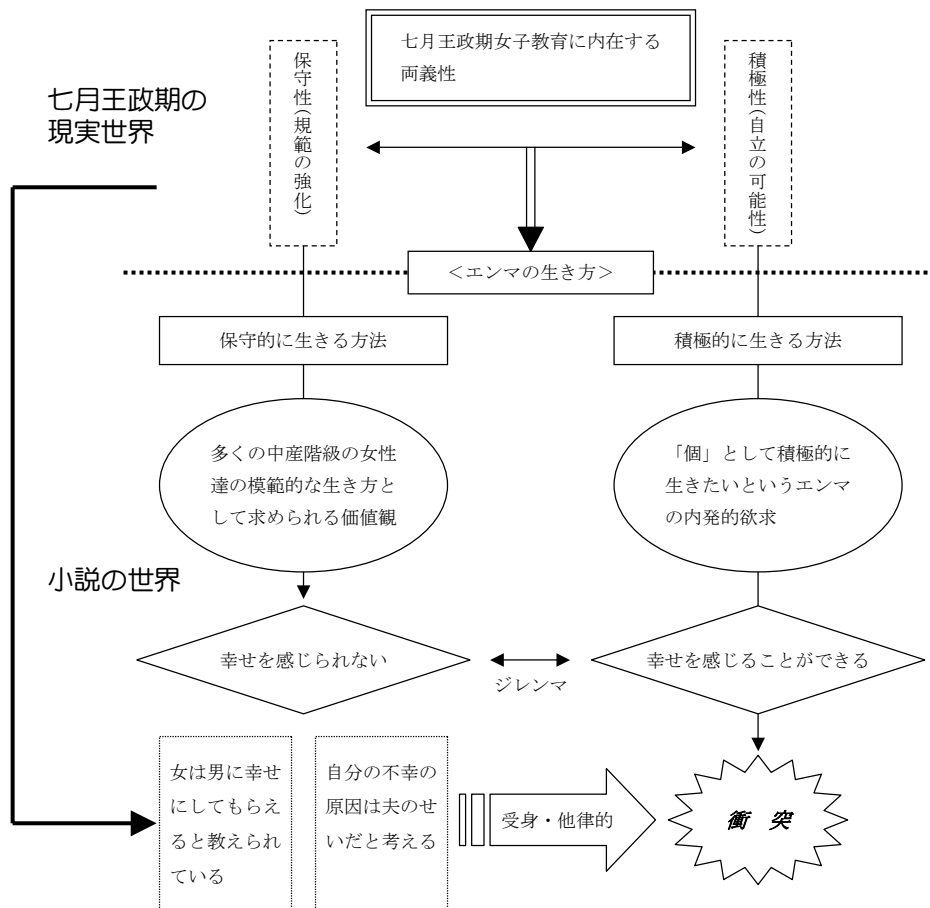


図2 エンマの生き方にみられるジレンマ

七月王政期の女子教育は、女性の能力は男性よりも下であると確定し、良い娘、良い妻、良い母になることを目的としていた。『ボヴァリー夫人』でも、当時の多くの女性たちがそうであったように、父、夫、神に依存する他律的生き方を奨励され、そのような教育方針に沿って、宗教教育と良妻賢母教育を受けていた。思考することを奨励されず、宗教、良妻賢母育成、家父長制の規範遵守型の教育を受けたエンマは、結婚した後は、ただひたすら不幸な存在として描かれている。しかし、当時の女子教育を受けた女性たち全てが、エンマのように不幸だった訳ではない。ここに、エンマと現実の女性達との違いがある。図2で示したように、たしかに、エンマは多くの保守的で他律的な中産階級の女たちと同じ保守的な性質を持っていた。しかし、一方で、七月王政期の女子教育が、二律背反的な価値を持つように、エンマ自身も、自分の内的欲求をかなえるため、自ら考え、自らの意志で目標を達成したいと願う積極性も持ち合わせており、アンビバレントな価値観を持つ女性であった。

フロベールは、主体的な性格をエンマに与えたにもかかわらず、女性が自らの意志では生きられない時代を『ボヴァリー夫人』の社会背景に選び、テキストの中では、エンマに他律的な教育を受けさせるように描いている。まるで、『ボヴァリー夫人』が、最初から「エンマの不幸の物語」として計画されていたかのように。社会規範と内在化した自己の間で衝突。これこそがエンマの苦悩・葛藤の原因であり、エンマを不幸にした主要因ではないだろうか。

## おわりに

『ボヴァリー夫人』におけるジェンダー構造を明らかにするために、『ボヴァリー夫人』の時代背景である七月王政期の女子教育に焦点をあてて、『ボヴァリー夫人』を再検討してきた。

七月王政期の女子教育は、長期的展望を持って女性の知識を増やし、女性を社会の有益な構成員として教育することを目的とはしていなかった。女は男の補佐をする役割であり、男の副次的産物とさえ考えられていた。しかし、そのような中でも、七月王政期の女子教育は、保守性と積極性という二律背反的両義性を持ち合わせており、家父長制を補完する役割を果たしている一方で、女性が自立するための機会を提供するという積極性の萌芽を見いだすことも可能であるため、七月王政期の女子教育が保守的であったとは一概にはいえない。つまり、当時の女子教育をめぐるジェンダー構造は、一見すると男性優位社会を補強しつつ、他方では女性の自立の機会を与えるようなアンビバレントなものである。

『ボヴァリー夫人』においては、宗教教育も、良妻賢母教育も、社交術も、初期の反応としては、エンマにとって効果的に働いている。これは、エンマが、初期の頃は、男性優位のジェンダー構造にうまく順応していることを表している。しかしながら、最終的には、宗教はエンマの魂を救うことはなく、良妻賢母教育は夫であるシャルルを喜ばせるのみでエンマの心を満たすこと

はない。社交術に関して言えば、分不相応な技術を身につけてしまった結果、華やかな舞踏会にただの一度だけ足を踏み入れたことで、華やかな世界への憧れを強め、エンマに現実逃避をさせてしまう。

当時の多くの中産階級の女性たちは、修道院での教育を活かし、社会から求められた家庭での役割を果たしていた。あるいは、一部の限られた女性たちは、社交術を活かして積極的に社交界に出入りし、自らの社会的地位を獲得している。さらに、第1章で述べたように、「講座」などの学びを通して、自立し、職業を持って生活する女性もいる。しかし、積極性と保守性を兼ね備えたアンビバレントな価値観を持つエンマは、社会の求める理想の女性にもなれず、かといって自立することも出来ず、自我を持った後では、宗教教育も、良妻賢母教育も、社交術も全てが無益であった。フロベールは、当時の女子教育がもたらしたジェンダー的諸問題に気が付いていたのではないか。だからこそ、『ボヴァリー夫人』の中で、結婚した直後からやせ細り、塞ぎこみ、原因不明の頭痛を訴えるエンマを描いた。そして、七月王政期の歪んだジェンダー構造に押しつぶされそうになるエンマの姿を通して、女子教育の問題点を暗示しようとしたのではないだろうか。

『ボヴァリー夫人』は、一読すると、結婚生活に不満を持ち、満たされない感情を埋めるように不倫、浪費、借金をし、最終的には服毒自殺をするという、一人の女の転落の人生を描いた物語である。しかし、女子教育に焦点をあて、ジェンダー構造を解明しながら『ボヴァリー夫人』を再検討するという本稿の試みにより、新しい読み方が提案できるだろう。すなわち、アンビバレントな性格の持ち主が、保守性と積極性という両義的価値を持つ七月王政期の女子教育を受け、それによって、自我が芽生えた時に不幸が始まるというストーリーである。つまり、『ボヴァリー夫人』は、一義的ではないジェンダー構造を背景として、そのジェンダー構造に挑戦し、失敗した一人の女の人生の物語なのである。

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2011年10月11日付)